

文化審議会 第1期文化経済部会（第4回）

令和4年3月29日

【吉見座長】 定刻となりましたので、ただいまより第4回文化審議会文化経済部会を開催いたします。

委員の皆様には御多忙のところを御出席いただき、誠にありがとうございます。

今回は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンラインで接続しての開催となります。

会議の傍聴につきましても、感染拡大防止の観点からYouTubeライブにて公開しております。音声配信の都合上、タイムラグが生じることもございます。御不便をおかけしますが、何とぞ御了承ください。

本日、河島委員、島谷委員、後藤委員は欠席となっておりますが、委員16名のうち13名が出席されておりますので、運営規則第2条第2項に基づき、本会議は成立いたします。

さて、この3か月間、先生方におかれましては、大変お忙しいところこの部会にお集まりいただき誠にありがとうございました。今期は今日が最後でございます。Zoom開催ばかりで、実際にお会いしてお話できないのが本当に残念ですけれども、なかなか日本は慎重な国でございます。いまもコロナ感染予防を最優先しております。

今朝、BBCですか、ニュースを見ていましたら、ウクライナ南部のオデッサで今もナイトクラブをやっていて、ミュージシャンが空襲下で演奏しているようですね。これを見ると何か文化へのこだわりの強さ、もうこれはちょっと圧倒的なものを感じます。我々、何とか日本の中で、空襲下ですら文化にこだわるという、このこだわりをどうつくっていくかというのを議論しているようにも思います。今回、いろいろ資料を既に送らせていただいておりますので、忌憚のない御意見をいただきたいと存じます。

それでは、早速議事に入らせていただきます。議題の1、文化と経済の好循環についてということで、幾つかの資料の、これまでまとめてきたものを御提示しておりますけれども、これについて事務局より御説明をお願いいたします。

寺本課長お願いします。

【寺本課長】 事務局でございます。本日、お送りさせていただいた資料のうち、報告書案、文書になっているもの、それとあとパワーポイントをベースにした参考資料、これを使

って御説明させていただければと思います。それで報告書案が今日、御相談を申し上げたいそのものになりますけれども、このパーポイントで、簡単にちょっとおさらいを兼ねてよろしく願いいたします。

ページ、2ページ目でございます。文化芸術活動における2つの創造的循環という議論を前回していただいております。第1の創造的循環、文化芸術活動、樹木を生み出す土壌、土壌を豊かにする循環、それから第2の循環、育ってきた樹木を、さらに森林経営の用語で言いますと保育し価値を高めていく、そういう循環、これらが有機的に回転をする中で資金が生まれ、それがまた再投資なり資金も入ってくる、それだけではなく人も入って行ってという形でうまく循環していく、それが文化と経済の好循環ということになっている、そういう議論でございました。

続きまして、同じくパーポイントの4ページ目でございます。7つの渦ということで、前々回から我々が目配りをする要素を軸を立てて議論してきております。人材、それから地域、場所、マーケティング、ブランドプロモーション、ファンドレイジング、資金ですね。それからデジタル、アーカイブ、グローバル、そういった論点があったかと思っております。

これらの相関関係ということでイメージを、次のページ、5ページ目でございます。下半分、国内を中心とした地域、場所、そこにおいて人材育成や、それからファンドレイジング資金面、それからデジタルといった基盤、それから、様々な成果物などをアーカイブしていく、データを整備していく、そういったことをしながら土壌をしっかり豊かにして、生まれてくる文化芸術を、上の半分になりますけれどもマーケティング、ブランディング、プロモーション、世界に対して打ち出していく、上半分はグローバルの市場ということでイメージをしています。そういった相関関係かと理解をしております。

それで、この7つの渦の下で御議論いただいた様々な視点というんでしょうか、それを本文、まとめていっておりますけれども、本文の8ページ目、簡単に御紹介申し上げます。まず人材の文面では、担い手の意欲とそれから安定した就労環境、安心して就労できる環境づくりが大事であると。それから国籍を問わずアーティストが日本の国内で活躍できる場づくりが大事である。それから鑑賞者をつくっていく、ファン層をしっかり広げていくことが大事である。それからそれだけではなくて、マーケティングなどを念頭に置いた場合にプロデュースをしていく人材が大事である、9ページ目でございます。

それから次に、地域、場所という視点からですけれども、文化的価値を生むのはそのもの、材だとか建物そのものだけではなくて、地域とか場所とか広がりを持った空間で生まれて

くる。それから、そういった場所においては文化観光という要素が非常に大事になってくる。10ページ目ですね。

それからマーケティング、ブランディング、プロモーションという観点から、日本の中というのは様々な文化、芸術があふれていまして、日本という博物館と言えるんじゃないかという話がありましたけど、こういったものをしっかり見える化をしていくことが大事。

続いて11ページ目でございますけども、そういったものがしっかり受け手に訴求するような、そういう仕組みが大事である。それからその観点からは、グローバルなマーケットに向けてしっかりブランディングしていくことが大事である。

続きまして、12ページ目でございます。4つ目のファンドレイジング、税制とありますけれども、寄附寄贈というものをしっかり進めていくことが大事である。それからファンドレイジングの観点から、寄附を行うような主体と文化芸術を行う主体、そういったものの交流促進なんかも進めていく必要があるという話。

続きまして、13ページ目のDXデジタル化の関係でございます。デジタル技術、様々に発展してきておりますけれども活用していこう、それからクリエイターエコノミーという発想、こういうものもしっかり取り込むことが必要ではないか。

続きまして、14ページ目でございます。文化芸術活動、担い手に関する統計、データ整備、アーカイブ、この辺りを充実していくことが必要ではないか。感覚的に話をしても仕方がないところもありますので、そういった要素が重要だという話がありました。それから、様々な文化的な資産、作品、そういったもののアーカイブをしっかり国内で行っていく、経済的価値を生み出す手前のところをしっかり国がやっていくべきではないかという話がありました。

続きまして、15ページ目でございます。グローバル市場への積極的な関与ということで、我が国の文化芸術、しっかりグローバルに展開していくことも大事ではないか、ワーキングでもこういった議論をしてきております。それから世界のマーケット、世界の状況に対応した戦略性もしっかり持つことが大事じゃないか、そういった話を持っております。

それに続いて様々な基盤的アクションとして考えられるものが、本文においては列挙していておりますけれども、これらはちょっと施策ベースに整理をちょっとし直したものというのが、パーポイントに戻りますけども、パーポイントの9ページでございます。取組をしていくといいじゃないかという方向性、案の整理ということで、一つ軸になってくるものとして文化芸術の振興機能、アーツカウンシルということで御議論を様々にしていただ

きました。かなり幅の広い文化芸術領域において、様々な領域の課題を見つけ出して、それについてしっかり伴走型で必要なサポートなんかを進めていく、そういった機能をしっかりつくっていく必要があるんじゃないか。そしてその下での具体取組なんかは、先行的に実証FSなどで推進していく、そういったことはできないかという話でございます。

それから、個別の文化芸術領域で様々に取組をなすべきじゃないかというものが上がってきております。地域などでの文化的価値をしっかりと活用していくような実証的取組だとかデジタルの取組、それから例えばでありますけどアート分野での美術館、これの機能強化、それから統計などのデータ充実。

それからもう一つは、これは第2の循環、つまり価値づけの循環に非常に密接だと思えますけれども文化芸術領域、広くは食文化だとか観光だとか、そういった観点も含めてのソフトパワーをグローバルにしっかりプロモーションをしていくべきではないか、そのために関係機関、政府系機関、まず関係省庁及び独立行政法人などの政府機関などの連携をしっかりとっていく。そして例えば、世界のトップレベルのアーティストを形成していくとか、世界に日本の文化関連のビジネスが展開していくことなんかを一緒になって取り組んでいく、そういったことが大事じゃないか、そういった施策などが入っております。

そして次、10ページ以降でございますけれども、アクションプランという形で検討しております。この個々の取組については様々に進捗のスピードの可能性だとか、それから中身が動かし方、動き方が固まっていない状態でなかなか言いにくい部分とか、様々にございます。であるので、なかなかちょっと一概に、これとなかなか示し切れないところはあるかと思っております。こういったものについては私ども、この今回の報告の後にも引き続きブラッシュアップしながら、それから委員の皆様なんかにも御知見いただきながら、具体的に進めていきたいと考えております。

幾つか例として挙げておりますけれども、米印がついたものを今回簡単に挙げさせていただきます。11ページ目でございますけれども、文化芸術カウンスル機能の強化、エコシステムをしっかりとつくるために取組をしていく必要があるのじゃないのかということですね。先ほど申し上げました伴走型で実施をしていく、それからパイロット事業になるようなものを進めていくことをしながら、こういった機能の設計とか、体制づくりというのをしっかりと来年度以降進めていくということかと思っております。

それから続きまして14ページ目でございます。外国人材を含めた専門人材をしっかりと育成登用していく点ですけれども、公立の文化芸術組織において常勤のポジションだとかト

ップといったレベルで、日本の文化芸術のマネジメントやプロモーション、コーディネーションなど、そういった発信などをはたしていけるような人材をちゃんと配属していく、そういう取組を進めていくといいじゃないのかという話です。

続きまして、15ページでございます。地域でございますけれども、文化芸術を様々形成していく中で、一つの軸として地域芸術祭というものが挙げられるかと思えます。日本全国で様々でございますけれども、おのおのの地域芸術祭のうまく機能するエコシステムという観点で考えた場合に、例えば人的ネットワークをもっと広げるとうまくいくんじゃないのか、それからロジスティックス、開催する際のロジスティックスが弱いんじゃないとか、資金面が足りないというものだけではなくて様々に要素があるかと思えますので、しっかりこれらを分析しながら必要な取組を実証的に進めていく、そういうことが必要かと思っています。

続きまして、16ページ目でございます。これは地域の劇場、文楽劇場を例に前回、前々回と簡単に御紹介申し上げております。ファンが固定化、高齢化して担い手も高齢化していく中で、どうやって魅力のあるものにしていくかという取組でございます。

続いて、17ページ目でございます。次、お願いします。これは世界を引きつけていくような取組として、発信をどう強化するかという意味で、既にちょっと取り組んでいるものを御紹介申し上げます。今年度、文化庁とNational Geographic、イギリスのNational Geographic、この日本支社もありますけれども、イギリスの本社の側と組みまして、これはホームページの広告の、広告といいますか記事の最初の部分でありますけれども、日本のアートフェスティバルということで、地域芸術祭を様々に取り上げたものを記事にして発信しております。実際に表示された件数などで見ますと、大体280万人ぐらいに表示がされて、そのうちクリックしたのが1.7万人ということですが、通常のこの手の記事のクリック数に比べると、ポイントでいうと1.5倍ぐらいをとっておる状態であります。日本の目線、日本人による目線というだけではなくて海外の目線、そういう目線での取組であります。こういうことを強化していく必要があるんじゃないかと思っています。

18ページ目は、鑑賞教育をしっかり抜本的に強化していかなければいけないじゃないかという話でございます。

続きまして19ページ、この辺りはワーキングで議論をしていただいていること、そのものでありますけれども、寄附を促進するために何をやらなければいけないか、例えば企業版ふるさと納税などの既存制度などの活用をしっかりと促進することも、重要な一つの要素じゃ

ないかということが挙げられております。

それから20ページ目でございますけれども、美術館とコレクター、民間コレクターをしっかりとクラクションを強化することで継承を進めていく、マッチングなどをしっかりと進めていくことを考えていく話であります。

21ページ目、それから22ページ目でございます。これはデジタルの関係ですけれども、クリエイターエコノミーへの対応であるとか、それからNFTをどう活用していくかといった観点から、具体的な事例を文化庁としてもしっかりと措置することを考えていきたいと思っております。例えばバーチャル日本博、日本博という取組は数年前からやっておりますけれども、これのバーチャル版などで取組をしっかりと進めていくとか、あと国宝なんかもうまく活用した取組をつくっていく、そういうことを行うとともに、そこから得られる様々な知見もしかりですけれども、実際の応用のためのアイデアというんでしょうか、そういったものも整理してまいりたいと思っております。

23ページ目でございます。アーカイブをしっかりとしていくという話ですね。これも進めてまいります。今、例えば映画領域などで取り組んでいるものを幅を広げ、それから深さというのでしょうか、アーカイブからさらに振興に広げていくということを、広げていきたいと思っております。

24ページ目でございます。ナショナルコレクションの形成ということで、アートのナショナルコレクション形成ですね。これも現代美術という領域が広がっていく、アーカイブと同じでありますけれども、そういう視野を広げていく、コレクションの幅を広げていく、そういったことをパイロットプロジェクトなども含めて進めていく、それから同時代の収集もやっていく、アートワーキングで議論してきておりますけれども、そういったことを考えております。

27ページ目でございます。これも基盤・制度ワーキングで議論いただいておりますけれども、公的な鑑定評価制度、時価評価などの前提になる鑑定評価制度をしっかりと検討してまいります。来年度、4月以降ですけれども、早速にもこれの専門の人材で議論を、具体の制度化していく場を持っていきたいと思っております。

続いて28ページ目です。グローバルな目線の話ですけれども、トップレベルのアーティストなどを育成していくことにチャレンジをしていこうと考えております。アーティストもしかり、批評家、キュレーター、それからプロデュース人材、こういった人材を輩出する仕組みづくりを考えていく。その前提としては、文化芸術の領域ごとに広い意味でのキャリア

パスというんでしょうか、グローバルの中でのキャリアパスというのが想定されると思うんですけども、そういうものを調査をしながら、例えばオペラの分野ではこういうステップを踏んでいくのがいい、キュレーター分野ではこういうステップを踏んでいくのが望ましいんじゃないかということを描きながら、しかるべき人材をしっかり派遣などを通じて成長していただくように、一緒に走っていくことを念頭に置いております。

29ページ目でございますけれども、これはむしろビジネス面のグローバル展開をしっかり支援していこうという話です。例えば音楽、それから映像、活字、こういった分野について担い手とか事業者の方としっかり議論をしながら、海外展開のプラットフォームをつかっていく、そういったことを進めていくことを念頭に置いております。

ちょっと駆け足になりましたけれども、そういった内容で今回御議論いただければと思います。よろしく願いいたします。

【吉見座長】 ありがとうございます。意見交換の時間は後ほど設けさせていただきますので、ただいまの事務局の説明について、個別的なところで委員の皆様からもし質問がございましたら、いただきたいと存じます。何か個別的な質問はございますでしょうか。よろしゅうございますか。

特に御質問の方いらっしゃいませんようですので、意見交換に移りたいと思います。かなり大部の資料になってしまいましたけれども、今回この文化経済部会での報告書案と、それからアクションプラン、具体的な例ということで、パワポの資料を先生方に送らせていただきました。これからの議論ですけれども、この報告書案は文化審議会に報告されて、また公になって、これが軸の資料となっていくものですので、できるだけきちんと水準の高いインパクトのあるものに、まずはこの期として仕上げていきたいと考えております。

これから皆さんの御意見をいただきたいのですけれども、目次を見ていただいておりますように、この報告書案、総論が1で、それから2が18ページ以降、エコシステム形成の具体的な取組案となっています。さらに、3が各ワーキンググループ報告書の概要です。このうち総論に関しましては、既にかなり御意見をいただきまして、まだ十分取り込めていないものも若干はあるかもしれませんが、この間、かなり私と事務局でやり取りをしながら詰めてまいりました。ですので、もしここが落ちているとか、これをちょっと入れておいてほしいということがあれば、御意見をいただきたいと存じますけれども、私どもとしては、ある程度の完成度にはなっているんじゃないかと考えております。

他方、3のところの各ワーキンググループの報告書は、それぞれのワーキンググループか

ら非常に熟度が高いものをすでに出していただいております、それをまとめたもので、これもここで手をつけるということは基本的にはないと思っております。

それに対して、2のエコシステム形成の具体的取組案のところは、まだ私は議論が不十分といたしますか、十分ではないと認識しております。そこで、ここをどうブラッシュアップするかということが、今回の議論の一番の柱と考えている次第です。

お手元のこの報告書案の18ページ目を見ていただきますと、7つの渦に沿った取組案というのが出ております。ずらずらずらっと並んでおりますけれども、これ、カードは全部出しているんですけども、このカードは全部出している、どれにプライオリティがあるのか、そしてそれがどう構造化されているのかということ、まだ何て言いますか、練り込めていないという認識がございます。

それをもう少し議論していきたいんですけども、私の認識を申し上げさせていただきますと、この基盤的な政策の中で、①我が国文化芸術全般を振興するカウンスル機能の確立、強化となっております。これはどちらかというと、先般から出ております2つの循環のうちの第1の循環に関わることですね。②のところ、我が国政府における文化技術、ソフトパワー、プロモーター機能の強化が出ております。これはどちらかというと、すでに議論してまいりました第2の循環に関わることですね。第1の循環がとりわけストックの部分といたしますか、基盤をどうちゃんと熟させていくのかの問いだとすれば、第2のところは人の問題、人材の問題がとても大きいと思います。その辺りのことをもう少し、他のいろいろ出ている取組案と結びつけながら、御意見をいただきたいと思っています。

もう一つは、(1)が7つの渦に沿った取組案ですが、(2)が政策ベースでの取組案の整理となっているのが23ページ以降出ています。23、24ページに出ていますけれども、これが前から出ているKPI等につながる話だと思うのですが、ここもまだ不十分だという認識を持っております。これも、もうちょっとバージョンアップする必要があると認識しておりますので、これについても、ぜひ忌憚のない御意見をいただきたいと存じます。

一般的な言い方になりますけれども、この報告書が実質を持ったものになっていくためには、目的に関してもいろいろな諸方面、産業界も含めて、あるいは国民も含めて、非常に共感を呼ぶものでなければならぬし、その目的に対してどのような戦略をとるのか、また、さらにその戦略に対して、どのような戦術をどう具体的な条件の中でとっていくのかということがとても重要だと思うのです。この戦略や戦術の部分で、先生方のより御専門の御見地からの御意見をぜひいただきたいと存じます。もちろん総論に関しても、もしここが抜

けているとか、いろいろあったら御意見をいただけましたら幸いです。

では、委員の先生方から御自由に御意見をお出してください。この挙手ボタンを押していただきたいと思います。できれば2回回したいので、それぞれの御発言、手短にお願いできれば幸いです。

黒澤委員、お願いします。

【黒澤委員】 よろしく申し上げます。御報告書、取りまとめ、お疲れさまです。ありがとうございます。大変分かりやすくなってまいりましたが、個別の項目で私から幾つか言及させていただきます。ちょっとページが飛んだりとかするかもしれませんが、御容赦ください。

まず中間支援組織とカウンスル化については、異論は全くございません。ここが強化されることで、非常に多様な活動への目配せと配慮というのが可能になっていくのではないかと、それはジャンルを問わず、芸術全般において非常に求められていることだろうと思います。

それから国際連携については、人材の現地派遣など、これは国際交流基金も含め今までかなり日本は行ってきていると思うんですけれども、ぜひとも現地の専門家の登用、先ほどもありました外国人の登用なども含めとありましたので、現地で調査活動を行っている人たちの、何らかの組み込み方が問われているのではないかなと思っています。

それから、ちょっとページ数を忘れちゃったけれども、東アジアワイドというコメントがありますが、東アジアだけというのはちょっとあまり現実的ではなくて、アジアに目配せをするのであればアジア圏プラス大西洋圏、アジアパシフィック圏までの目配せは、どうしても今後とも必要になるのではないかなと思います。

それから、地域の文化芸術祭などを事例にとられて、様々な方たちが活動に組み込まれていくところは異論はございませんけれども、就労の環境ですとか、その後のキャリアパスなどを考えたときに、ボランティアを超えていくことがないと難しいのかなと思っています。ここはちょっと要検討、要コメントかと思います。なので、ローカルの方たちが参加すればそれでいいというのではなく、やはりローカルにおいてもエコシステムを確立させていくことに寄与する可能性があるのではないかなと思っています。

それから、National Geographicの取組、発信としては非常にいいと思っているんですけれども、こういったイベント、日本博もそうですけれども、イベントを取り上げてインバウンド誘致とか、そういうことは非常に取組としては分かりやすいと思うんですが、今回、この部会でぜひとも進めてい行きたいと私が最初に思ったのは、恒常的にサステナブルな体

制、取組をぜひとも明確にしていくことで、足腰の強い基盤整備というのが求められていると思うんですね。なので表層的なと言ったらちょっと語弊ありますけれども、分かりやすいところだけをどンドンドライブしていくことではないところに、ぜひ注力していただきたいというのがあります。

それからもう一つ、自治体の自立性も当然鑑みなければなりませんけれども、特にその美術館におけるコレクションの形成については、実態から考えると急務だと思いますし、既に持っているコレクションの訴求整備、アーカイブも含めての整備にどれだけの尽力と予算を積み込むことができるかというのは、ぜひともお考えいただきたいところです。眠っている文化資産、それからこれから形成しなければならない文化資産、いずれも人がいなければできないことですし、様々なサポートがなかったら、とても単体の自治体だけでは難しいところだと思います。ぜひ特定の項目に対する支援を明確化していただきたい希望があります。特にそのコレクション形成ですね。

以上です。お願いします。

【吉見座長】 黒澤委員、ありがとうございました。大変重要なポイントを多く言ってくださったと思います。恒常的のサステナブルな体制がつくられなければいけない、足腰の強い形をつくらなければいけないというのは、私も全く同感でございます。土壌ということを非常に強調したのもそういう意味だと思います。一本一本花を咲かせようということではなく土をつくろうということが、この部会の目的だと思っております。

どなたか、ぜひ御意見をいただきたいと存じますけれども、生駒委員お願いします。

【生駒委員】 御説明ありがとうございました。丹念に取りまとめてくださっているとありますが、私、ピンポイントですけれども、文化芸術振興に向けた横断的な対応というところについて、ちょっと発言させていただきたいと思います。

日本の文化をソフトパワーと捉えて輸出していこうという動きは、非常に重要だと思っているんですけども、もしこのソフトパワーを本格的にプロモーションしていこうという向きになりましたときに、例えば文化庁単体ということではなくて政府横断的に、例えばインフラ輸出もそうされていますけれども、内閣官房である、つまり官邸の司令塔機能を使って、オールジャパンでぜひ進めていただければと思っています。それに値するぐらいの非常に重要な案件だと思っております、全省庁が協力する体制のもとで、ぜひ司令塔は内閣官房に置いていただけるといいかなと思うんですけども、そういった体制を強化して、ぜひ本格的に取り組んでいただければと思っています。

以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。ソフトパワーの「ソフト」の意味が随分変わってきたんだと思うのですね。社会全体がハードからソフトへとといいますか、ソフト化している。つまり、モノからむしろコトへの流れが、全世界的な資本主義のメカニズムとリンクするようになっている状況があり、文化庁の意味も本当は変わってきている。文化庁だけでは文化はもうできない、「文化」とか「ソフト」とかが社会の基盤となるととても大きな概念になってきているという状況をしっかり諸方面に訴えていく必要があると思います。

ありがとうございます。佐伯委員お願いします。

【佐伯委員】 ありがとうございます。まず「報告書案」の感想からですが、総論を読んで見事にまとめられていらっしゃるなと思って、実は感動いたしました。今の時代にふさわしい文脈がとれているので、感銘をうけました。私は映画とかアニメーションの専門家なので部分的に発言はできるんですけど、それがここでの議論総体とどのような位置関係にあるのかなというのが、これを読んでよく分かりまして、非常にある意味勉強になりました。

頭、ちょっと余分なことを申し上げます。実は「ドライブ・マイ・カー」が、アメリカのアカデミー賞で国際映画賞を取りました。今大変話題になっているので、あえて付け加えておきますが、これ、エコシステムではないんですけど、この濱口竜介監督という方の、この作品は芸術文化振興会の支援（文化芸術費振興費補助金）を受けております。それからカンヌ国際映画祭に出品したときには、文化庁がユニジャパンを通じてここにも支援が入っております（日本映画海外発信事業）。現地に行かれること、そこでプロモーションされることも含めて支援が入っています。さらにもっと言いますなら、濱口監督個人も在外研修（新進芸術家の海外研修）という形で、たしかアメリカだったと思うんですけど、文化庁の研修システムを使って学びに行かれてもおります。様々な公的サポートが、実は見えない形で入っていますよということを伝えておきたい。ただ一目瞭然にこれ分かるようになってないので、全部の事業が見えるようなところでいけば、これは連鎖といいますか、つながっているんだよということだけは、ちょっと文化庁の代わりにOBとして、実はちゃんとバックアップしているところもあるんですよという意味で強調しておきたいです。

本論です。もうエコシステムの基盤的施策、とりわけ1丁目1番地といたら、このカウンセル機能ですよ。ここはこの資料にもありますように、芸術文化振興会基金部の在り方、こういう状況下でどう伴走していくのか、我が国の文化芸術における伴走者足り得るのか

ということは、やはり話し合わないといけないのではないか。結局どこかが担わなければならない。連携するにしても、ハブの中心になるところが必要になるので、芸文振の役割は大きい、そこは非常に強調しておきたいなという気がいたします。

あとは私の分野で映画とか映像部門ではもう大体お願いした部分は書き込みがありますので、メディア芸術、映画とかアニメーションとかマンガとか様々な分野を一つ発信能力の高い分野として総合的な振興普及、それからアーカイブも含めまして全体が見れるような、美術というよりはメディア芸術分野のそういう核というものを一つ確立していく方向性も、とても大事なのではないかと思っております。元に戻りますが、実に勉強になりました。ありがとうございました。

以上です。

【吉見座長】 ありがとうございました。今の「ドライブ・マイ・カー」の例は典型的な成功例で、これらをどう見える化するかが非常に前向きな課題ですね。多くの委員の先生方がカウンスル機能の強化、これが1丁目1番地だという認識を共有していると思います。

山田委員をお願いします。

【山田委員】 お取りまとめ、本当にありがとうございました。私も大変勉強になっております。

今、生駒委員がおっしゃっていたソフトパワーによる日本のブランディングという点は、全く同意見ですし、そのためには文化庁単体でなく省庁横断的にというのは、私もこの委員会で何回か発言してきました。国を挙げて文化をソフトパワーとして守り、活性化するための障壁にならないように省庁を超えた政策が推進できる枠組みを、ぜひ進めていただければありがたいと思っております。

それから黒澤委員がおっしゃっていたサステナビリティ、足腰を強くするという部分ですけれども、実は日本の文化って個々の努力と力量に大きく委ねられています。諸外国に比べ、国や社会的なバックアップというのは本当に少ないなとまだまだ感じます。

一例を挙げると、食の世界ではアワードやコンクールで優勝したり星がつくことが、レストランが選ばれる際の世界的な指標になっているため、世界的な国家間の競争になっていて、幾つかの国はコンクールで勝てるように国を挙げてバックアップしているそうです。そこに対して予算をつけ、人員も出すわけですが、対して日本は個々のシェフが自分でお金を工面して、自分で荷物を持っていくしかない。手荷物をぶら下げて来る日本人に対して、外国勢はタンクローリーで来るような感じだと。そういった意味でも非常に個々の体力に

委ねられていて、それがいろいろなところでもう本当にぎりぎりの段階に来ていると思います。

合理性の高いビジネスがお金を持つ社会において、富裕層も含めた海外の人たちが日本に来るときに見たいのは、アートや文化、食、職人技など、非合理的な、労働生産性の低い層が生み出す世界。このままいくと、コロナが開けて彼らが来る頃には、多くのものが立ち行かなくなっている状況にもなりかねないと聞きます。IT化、AI化など合理化が進むところは経済力を蓄えていきますが、人を使ってアナログにやっている文化的なものは、どんどん苦しくなっていく。そこに対して社会制度として税制などもどうするのかも、先ほど申し上げた省庁横断的な側面を考えていかななくてはいけないと思っております。

【吉見座長】 ありがとうございます。日本の文化は個々の人の力量や努力に委ねられてきたけれども、もう限界に達している。私は、この状況は教育とすごく似ていると思うのですね。どちらも、非常に属人性が強くて、組織的に支えるというよりも、心ある一人一人が本当に頑張っていて、何とかもってきた。こういう在り方が限界に達している。

個人に委ねすぎると、その個人が善意で頑張れば頑張るほど疲弊していってしまう。この問題を解決するには、やっぱりバックで支えることですね。つまり、一人一人の努力を後ろで支えるスタッフだとか組織だとか体制だとか、その部分が非常に弱いから、頑張る人が個人で頑張っちゃって、それである程度までは何とかなるんですけども、それはもう一人一人の能力が比較的高いからだと思えますけれども、でも結局、力尽きる、どっかで力尽きるわけです。日本は、こういう構造をずっと続けているような気がしますね。

ありがとうございます。山口委員お願いします。

【山口委員】 取りまとめ、ありがとうございます。より、明確になってきたのを実感しております。私は産業界の人間なんで今、やっていることも含めてお話しさせていただきますと、例えば7つの渦のエコシステムをアクションプランに移していく際に、企業など産業界をどう巻き込むか、どう参入させるかを考えての仕組み作りが重要だと思います。アートの産業化に取り組んできていますが、アートや文化は企業の本業から見るとまだ遠い存在です。メセナやブランディングだけでなく、より本業に近い領域でどう捉えるかが課題だと認識しております。DXやNFTやメタバースが出てきて、イノベーションが起き、アート分野にも企業の参入が始まっていますが、エコシステムへの新しい企業の参入を促すような仕組み、仕掛け作りができないか。また、様々な産業界との連携、観光や食のみならず、医療や教育や交通や金融など、文化と経済の循環を広く捉えて、省庁間連携で、イノベーシ

ョンが起きる仕組み作りが課題です。地域創生の要として、美術館・博物館、劇場等、文化施設を中心に位置付けることも必要だと思います。今後、文化施設の改修などが増えて行く中で、資金や人材の投入、民間を活用するコンセンサスのためにも、なぜ文化や文化施設が必要かをしっかり構築していきたい。それがサステナブルにつながると考えます。

例えば広くもっと産業界との連携みたいなもの、だから観光とか食とかだけではなくて、もっと広く例えば医療だってあると思いますし、そういう実際に、何て言うかな、アートを使った医療みたいなものを始まってはおりますし、あるいは教育産業でもそうだしと思いますし、もう少し広く構えてもいいかなと。だからそういう他産業界との連携、そこにまた省庁間連携がつながっているとは思っております。

以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。今、山口委員からおっしゃっていただいたように、医療とか教育とか福祉とか地域とか、そこまで含み込んで文化ということを考えていうこと、これももう一つの1丁目1番地というか、我々がやるべき根本のことだと思っています。先ほど申し上げましたように、社会全体がソフト化することは、ある面では社会全体が文化化することだと思いますので、そこら辺りをどう産業界や企業の方々と一緒にコラボしてやっていくか、この仕掛けをどうつくるかが大変重要だと私も思います。前回、岡室委員からも同じように経済界、産業界との対話が、まだちゃんと組み込めていないんじゃないかという御指摘をいただいて、皆さん共感したんですけれども、この次のフェーズがもしあるんだとすると、経産省とか企業とか産業界の方々と我々がお話しをさせていただく場を継続的に設定する。これは文化庁のスタッフの皆さんに努力していただいて、そういう場を持つことが必要じゃないかと私も思う次第です。ありがとうございました。

それでは、森信委員お願いいたします。

【森信委員】 ありがとうございます。取りまとめ、御苦労さまでした。大分立派なものがあったんじゃないかと思います。私から2点だけ申し上げます。1点はNFTに関することです。この分野は、グリーディーにお金がどんどん入り込んで、ファンドも加わり、ほうっておいても、どんどんパイが大きくなる分野だと思います。一方で、クリエイターにとっては中抜きがなくてダイレクトに経済的な利益を得られる、非常に有益な分野・システムでもあるんですね。問題は、この分野の法制度がまだ未整備、不十分であること。これは日本だけでなく世界的にも必ずしもはっきりしてないわけですが、そういう中で私の知っている限りでは、金融庁はNFTのTはトークンなので投資家保護の観点、投資家の詐欺に使われる

ことを防止しないといけない、そういう観点から既に検討を始めております。

それから国税庁は、これは当然、このトークンが動けば膨大な利益が発生するわけですから、それを使った租税回避とか、脱税とかというの防止しないといけないということで、既にそういう観点から検討を始めているんですね。

私が申し上げたいのは、そうやって政府のいろいろな部署で、それぞれの立場からNFTについての検討が始まっているんですが、必要なことは文化庁としても、まさにアートの振興、さっき言った中抜きのないクリエイターファーストの一つの機能、ファンクションという観点から積極的にNFTの検討を進める必要がある、あるいはどこかでやっている、これ、自民党でも始まっていますけど、そういうところに参加して、そういう価値観を持って検討に加わることが重要だと思うんですね。ほうっておくと投資家保護の観点とか徴税の観点だけになって、アートにはほとんど利益のないものになってしまう可能性が、往々にしてあるんですね。ということが第1点と。

もう1点手短に。寄附の話でふるさと納税の話ですがこれは数は少ないんですけど、どうメカニズムとして動いているかということ、地方自治体の部局に、アートを発信しようという問題意識があって、企画ができて、それで国の内閣官房に働きかけて、それを企業とつないでいくと、そういうメカニズムになっているものです。そういう地方自治体の文化などに非常に興味のあるところに働きかけていく必要があると、寄附というのは黙っていたら絶対集まらない、そういうふうに働きかけ、これ、文化庁さんの仕事かもしれませんが地方自治体から内閣官房に持って行ってもらって、そこで企業と何らかのつながりのある社長の出身地とか、創業の地とか、そういったところにつないではじめて、ふるさと納税が成功例として、出ているわけです。そういう作業が必要ではないかなと思います。

【吉見座長】 ありがとうございます。前半で言っていた問題、NFTもちろんそうですけれども、それを超えて重要なポイントだと私は受け止めております。

これは私個人の意見ですが、この部会は本当に多士済々、文化関連のすばらしい委員の先生方に集まっていたらいいんですけども、一つだけ言うと、法律の専門家がちょっと弱いというか、少ない気がするんですね。本当はこのテーマは法的な制度、知財の問題もそうですし、それから税の問題もそうで、そういう法的なところを専門的に押さえていただけの方を強化する必要があるんじゃないかと、前から思っています。

サコ委員お願いします。

【サコ委員】 ありがとうございます。先ほどの皆さんと同様に、よくまとめていただ

いて分かりやすくなって、ありがとうございました。

2つほど気になる点がございまして、一つは、この言葉使いの面なんですよね。結構、様々なキーワードが出ていて、似通ったようなもの、あるいは意味が結構重なっているものがあると思うので、これからグローバル展開していく中で、例えば現に一つの言葉で皆さん、バーンと4つぐらいの定義を付けたりとか、何かちょっと、前も話をしたんですけど、これって誰でも分かりやすくしていかないといけないと思うんですよね。この言葉の整理というのは、意味が強いところ、これまた国によって違っていたり、あとは企業によって、我々が例えばここでポピュラーカルチャーと言っているものを、ほかの国はどう捉えているかと。ある意味で日本的文脈とは何かというところを、これ、整理する必要があると思うんですね。今後はそれぞれの言葉の、本当に日本的文脈。

もう一つは、日本文化って特徴なのが、海外から結構憧れがあって、勝手に皆さんは自分たちの視点で理解して、そのまま結構使っていることが多いじゃないですか。柔道、いろいろなものにしても。そこに変な解釈をあまり、それに入っていないくて、彼らが理解したまま。でも実はときどき、その理解と日本の理解がずれることもあるんですよ。例えばよく、漫画アニメとか、いろいろなものを勉強しに来る学生さんたちは、こういう見方なんだっていうのがちょっとよくあるんですけど、非常にそれもどこかできちんと日本から、最近、日本料理があったように何が日本料理なのか、何が日本料理じゃないのか、だから我々日本の本当にそのものに対するきちんとした答え方というのは入れてほしい。

最後に外国の専門家を入れてもっと促進していくということで、多分この言葉の面からも、あと文化の面からも結構ずれがいろいろ生じてくるんじゃないかなと思うんですよね。日本のものを持っていくスピード、先ほど日本文化というのは結構時間がかかって、修行で精神的な、いろいろなところが多分あると思うんだけど、外国の専門家たちを入れたときの、このずれというのをどうカバーしていくかというところは、結構大きいかなと思うんですよね。そういう意味で、もっともっと学校というか、いろいろなところで外国の文化の専門家を入れて教えたりとか、もっと自由な目でいいと思うんですよね。

だから教育面でいうと、さっき、もうちょっと鑑賞の関心を社会的に上げていくというのは、実は今、低くなっているんですよ。ヨーロッパとかその辺と比べて、本当に日本の小学校、児童、子供たちの文化に対する鑑賞のレベルというのは本当に低いので、これはなぜかという、文化というのは日本の場合は文化芸術って日常なんです。美術館に行くものではなくて日常化されているもの。でも、それを今度経済の波に乗せようと思ったら、また別

の次元になるんじゃないかなと思うので、そのいわゆる文化芸術と教育を合わせた一つの鑑賞的な視点を持ってもらうことが重要だと思うんですね。

だから文化芸術というのはもう日常、地域にあるし、いろいろなところがあるし、もう隣にあるわけですよね。でもそれ、経済の視点で見ていく、文化芸術を経済的に評価していくんだったら、この経済と文化芸術の視点をちゃんと学校教育に取り入れる必要があるんじゃないかなと私は思っていますので、その点も含めて、また今後展開できればと思います。

私の発言は以上です。ありがとうございます。

【吉見座長】 ありがとうございます。最初おっしゃっていただいた言葉遣いの問題というのは本当にあって、日本語で表現していくと、どうしてもそういう面が出てくるように思います。これも私の個人の意見ですが、この報告書やその概要版は、英語化すべきだと思います。全部英語にしてみても、そして今度はその英語の概要版について、この委員の何人かで日本語ではなくて英語でディスカッションする。できると思いますね。英語でとにかくやっていくと、一つ一つの言葉のニュアンスというよりも、議論の構造性のほうが前に出ますから、むしろもうちょっと普遍性を持つんじゃないかという気もいたします。

あと、最後の問題は、子供たちの「文化」への関心の薄さ。全く同感ですけれども、日本では、非常に解決が難しい受験勉強体制の問題があって、これは簡単にはどうにもならないという、もっと大きな壁なのですが、突破していきたい気持ちはあります。

金野委員お願いします。

【金野委員】 ありがとうございます。御苦労さまです。

まず土壌の話、土壌のエコシステムについては、生活文化ですよね。建築とかクラフトの職人とか、シェフですね、料理人というのもアーティストなんだと、これは書いていただいているんですけど、という認識を強く持つべきだと思います。エコシステムということで考えると特にそうですね。農業なんかもそうです。ゼロイチをやる人はみんなアーティストだということで、実際私も田舎にいるわけですけど、黒豆やヤマノイモの圃場があるんですけども、上手に作る圃場は本当にアートなんですよ。ワイナリーなんかもそうですね。だからそういうのもアートなんだと、そのプレーヤーもアーティストなんだという認識を、一つ強く出してほしいというのが一つです。

それからもう一つ、概念図がたくさん出てきまして、大分分かりやすくなったんですけど、パワーポイントでいくと2ページ、3ページ、4ページ、5ページですかね。4つ作っていただいています。

まず1つ目の2ページの、すみません、正直ずっとしっくりきてなかったんですけど、その次のページ、3ページにさせていただけますか。これが出てきて、あ、なるほど、これだと循環になっているなと思ったんです。

先ほど山口さんがおっしゃったその企業の参画のようなのが左側のところに何か入ってくるんじゃないかなと思って。この絵、左側、寂しいじゃないですか。この第1の循環と第2の創造的循環、右側で使ってしまうと、左側はどうするのって絵になっちゃっているんですけど。この絵を見た時には、分かりやすくなったと思ったんです。

3つ目の概念図は、これは「渦」ですよ。これを立体的にしたのが4つ目だということですけど、何か1つにしたいですよ。そうしないとイメージが、このようにも説明できます、このようにも説明できますということに今なっているんですけど、何か2枚目の絵がすごくよくて、これだとぐるっと一周してきて土のところに返ってくるので、これに寄せるような形で、一元化できたらいいのではないかと思った次第です。

私から以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。確かに3ページの図、左が寂しいって、もう結構どんぴしゃですね。ここですね、ポイントはね。非常に納得しました。

岡室委員、お願いいたします。

【岡室座長代理】 前回も、文化と経済の対話が重要だということを申し上げました。

今日も委員の皆様から、例えば他省庁との横の連携が重要であるとか、いろいろな御意見が出ましたが、そもそも、対話の言葉をどう持つか、どう獲得するかということが非常に重要だと思っております。

今回このようにまとめていただいて、皆さんがおっしゃったように、とても素晴らしいまとめだと思います。

例えばこの総論の序のところなど、もうほとんど感動してしまうような文言ですけれども、果たしてこれが、企業の方や自治体の方に充分伝わるのかを危惧してしまいます。

例えばこの序も、文化ありきを前提としているように思われます。恐らく一番働きかけなければいけないのは、前回も少し申し上げたように、他省庁や自治体や企業の方たちであって、その方々になぜ文化が大事なのかということを理解していただくということが、根本的に日本で抜け落ちていることなのではないかと思うんです。

今回はもうこのまとめで、本当に素晴らしいと思うんですけども、今後どのようにすればなぜ文化が大事なのかを伝えられる言語を持ちうるのかを、考えていかなければいけな

いのではないかと。そうじゃないと、文化と経済の間の対話ということは成り立たないのではないかと思います。

一つの方策としては、先ほど委員長から、18ページの「エコシステム作りの具体的取組案」がまだ弱いのではないかと御発言がありまして、私もそのように思います。

書かれていることは全てそのとおりなのですが、若干抽象的な印象を与えてしまうように思われます。

例えば、構造化ということになるのかもしれませんが、すぐできることと時間のかかることを整理するとか、即効性を持ちながら長期的展望にも立って、このように文化を醸成していくんだ、文化と経済の好循環を形成していくんだというプランが、もう少し伝わりやすい書き方はないかと、皆さんのお話を伺いながら考えました。

できれば、すぐできることと長期的展望に立ってできることを整理しつつ、そこに、誰の支援が必要なのかということが明確化されていくとよいのではないかともしました。

例えば、省庁でいえばこの省であるとか、自治体であればこういう部門であるとか、あるいはこういう企業のこういう支援であるとか、そういうことを具体化していくと、もう少し文化と経済の循環を形成するシステムが具体化していくのではないのでしょうか。

先ほど、ふるさと納税のお話なども出ましたし、私も前回税制は非常に重要だということも申し上げたんですが、企業に対して、文化を支援すると税金の優遇が受けられるということも大事だと思います。一方で、根本的に文化がお題目ではなくて、文化があることで私たちの生活がこのように豊かになっていくか、日本がこのように国際的に尊敬される国になっていくとか、そういう根本的なことを語りかけるような言語、文言を文化の側からつくっていく必要があるのではないかと強く感じます。

あともう一つ、案をお示しいただいた時に意見をお送りしたんですけども、どうしても文化庁主導ということで、例えば国立映画アーカイブスのような国立の機関が協調されがちです。しかし、手前みそで恐縮ですけども、私が館長をしております早稲田大学演劇博物館で、一昨年度に文化庁の収益力強化事業の一環で、日本の豊かな舞台芸術を発信しながら収益力強化に貢献する循環のシステムを構築するために、舞台芸術の記録映像のアーカイブの検索サイトを開設いたしました。

個々の美術品などの評価システムも大事ですが、そういう民間の取組なども国として評価してくれるようなシステムも必要なのではないのでしょうか。

今日、アーカイブスのところに、少し文言を足していただいていたと思います。

「国内で整備が進みつつあるアーカイブの連携及び国際発信の強化」ということが書かれていますが、どうすれば国内でつくられている様々なアーカイブが連携できるかを考えるために、どういう取組が国内にあるのかを国のほうですくい上げながら、かつ評価しながら、こういうシステムの中に組み込んでいく、そういうことも重要ではないかと思います。

いろいろ考えたことはあるんですが、長くなってきましたので、この辺にさせていただきます。

【吉見座長】 どうもありがとうございました。私になぜ18ページ以降の具体的な取組のところがまだ、不十分じゃないかと感じているかという理由が、よく分かりました。

これは、取組案の羅列になってしまっていて、まだ工程表になっていないということですね。どのような取組をどういう順序で、どのような因果連鎖といいますか、相乗効果を発しさせながらやっていくのかという、その工程表としては見えないんですよ。

だからまだ、やるべきこと全部、並べられているという印象がまだどうしても抜けない。その辺りのポイントを言っていたように思います。今後、工程表的なものに近づけていく必要があるのではないかという気が私もしております。

大橋委員、お願いいたします。

【大橋委員】 ありがとうございます。まず、報告書取りまとめお疲れさまでした。

樹木の事例は面白いなと思って見ていたんですけど、確かに森林を取り上げると、多分、多面的機能って言ってるんだと思いますけれども、恐らく、森林一つ取り上げても、国土の保全であるとか、あるいは水源の涵養であるとかが挙げられるのだらうと思います。

そういうものを含めて、いろいろな価値が、恐らく樹木には存在していて、多分文化も同様のことだらうなと。この図に必ずしも表れているかどうか分からないですけれども、恐らく多面的な価値を謳っているということだらうと思っています。

そうしたものを経済と結びつける上で、グローバルな視点は、今後、特に日本においては欠かせないのではないかと思います。

多分、国内の議論をするときも、常にグローバルな展開も含めて考えなければいけないのかなと思います。

そうした観点で、インフラ輸出の話もあったので、そのイメージで申し上げると、我が国のインフラ輸出は必ずしも成功したと、現段階では評価できないわけですがけれども、幾つか、多分学ぶところがあって、私の目線で言うと、一つ言えることは、オールジャパンでやろうとしたということですよ。

オールジャパンというのはみんなの合意を取って進めるということですが、そこがスピード感の欠如に結びついたということがあると思います。

どちらかというとなら日本イニシアティブみたいに、要するにこう、もう先っぽがとがって、進める人にどんどん進めてもらうという形のほうが、私はいいんだろうと思います。

今回のカウンシル機能というのが抽象的で、どういうイメージを持っていいのかわからないですけども、そのような形で進めるのかなとは思っています。

あと、もう一つは、経済という観点で言うと、単品輸出で、その輸出、その単品ごとに利益を上げるという考え方でいくと、なかなか海外展開できないというのが、多分インフラ輸出のもう一つの点だと思います。

これ、ただ単に、品を持っていても売れなくて、恐らく、いろいろなものを引き連れていけないといけない。保守とか、あるいはインフラであれば、向こうの都市計画や交通計画の中に埋め込むという話になりますから、最初持ち出しが随分多いということですよ。

文化ももしかするとそうかもしれなくて、ただ単に物を持っていったら売れるというものを我々恐らく議論しているのではなくて、その評価をする人もいるでしょうし、あと買手も売手も、あるいはそれに伴うアンサレリーのサービスを提供する人たちもいると思うんです。

そうしたものをセットで考えていけないと考えると、何というか、投資的な側面というのがすごく、経済界の人たちに持ってもらって、目線として重要なのかな。

最初は損するかもしれないが、中長期的な観点に立ってビジネスをしてもらうということなのではないかと思っています。

そういう点での文化と経済なんだろうと思いますけれども、いずれにしても、ほかの分野で学べるということのはもしかするとあるかもしれないと思いますし、そうした中でしっかり工程表をつくっていくべきだというのは、委員長がおっしゃるとおりだなと思いました。以上です。ありがとうございます。

【吉見座長】 ありがとうございます。今のインフラ輸出の例というは大変参考になると思います。多分、海外に出ていくときに、単品では駄目ということですね。実は、日本はこれまでも、アニメ、ゲームというだけではなくて、例えば海外移民の問題もそうかもしれないし、都市計画の問題もそうかもしれないし、日本語の概念のような話もそうですけど、いろいろな形で総合的に、実は事後的に見るとやれてきていた部分が実はあるのではないかという気もいたします。

その辺りのことの検証ということも、重要なポイントになるという気が今、お聞きしながらいたしました。

それでは続きまして、大館委員、お願いします。

【大館委員】 私からは幾つか気になったところを申し上げます。

一つは海外発信、グローバル展開においてですけれども、もちろんプロモーション等々必要ではあると思うのですが、これはどこを対象に、どんな評価を求めていくのかという点です。

今、現状では、日本はもちろん、世界でもまだ欧米中心の価値観であり、アカデミー賞含め、海外で評価されたものが、その後日本で受け入れられる経過をたどっています。

従って、価値づけ、評価の部分で、長期的なもの短期的なもの、両方ともに、日本における価値がグローバルに展開できるような仕組みというのも必要であると思います。

また、アーティストの制作支援をするなかで、感じていることですが、助成金の拡充によって、アーティストにお金はまわるようになったものの、その申請や報告手続きなどマネジメントに関する部分がなかなかできていない。

したがって、経済的支援といったときに、金銭的支援だけではなく、プロボノのような形で、そうした経営、会計実務といった労務的なサポートをお願いできる仕組みができればと思います。また、そのような支援が、金銭的な支援が税務控除になるのと同様に、企業なりに対してアドバンテージを与える仕組みがあればよいと思いました。

【吉見座長】 ありがとうございます。大橋委員の意見とも重なるところがあるかと思えます。後でもう少し深めたいと思います。

小池委員、お願いします。

【小池委員】 ありがとうございます。私のほうからは、主に、資料の内容に追加という話ではなくて、資料の内容を基に、文化庁さんにお問い合わせが今日はありまして、コメントさせていただければと思います。

私のワーキンググループ、基盤制度ワーキンググループで、森信先生も含め一緒に議論させていただいた話に係るんですけれども、寄附について、ふるさと納税を使ったり、そういった既存の仕組みを使いながら、でも皆さんが、文化施設側が積極的に自分たちで集められるようなアクションを取ってもらえるようにというようなまとめをしたんですが、一番ハードルにきつとならうかと想像を容易にできることというのが、自力で寄附を集めると、補助金とかそういった、今までもらえていたものがもらえなくなるのではないかという恐怖

が、きっと文化施設側には生まれてくるのではないかと思います。

本当にそうになってしまうと本末転倒というか、せっかく頑張っている人たちが損してしまふようなことは避けたいと全員思っていると思うので、そこは文化庁さんに、こういったことはないんですよというようなことをきちっと御説明いただくですか、そういったことを周知していくようなアクションもセットで、行っていただきたいなと思っています。

あとプラスで、同時に、私の周りでも多いんですけども、若手経営者の方々、最近アートに非常に関心の高い人が多くて、そこに時間もお金も大量に使っています。そういった人々を巻き込んでいくというのが非常に大事だと思っていますので、何か目立つ事例を一緒につくって、PRをするなど。

それぞれの文化施設だったり、寄附の対象、寄附側、寄附をする人に対してこういった制度があるよという告知をしていったり、説明会を開く、セミナーをする、そういったことも大事だとは思いますが、分かりやすく、こういうことをすると格好いいよというような、事例で見せるというアクションを、ぜひ文化庁の皆さん主導で、そういった取組を行っていただければうれしいなと思っています。

あともう一つは、先ほど森信先生からも一言いただいておりますけれども、クリエイターエコノミーについてもコメントさせてください。

クリエイターエコノミー、御存じのとおり、規模がどんどん拡大してしまっていて、今何か世界で12兆円ぐらいの規模があるのではないかという試算も出ています。

これ、どうしても、何か、欧米の話みたいに思いがちだと思うんですけども、日本の結局、作家やクリエイターの皆さんというのは、非常に世界で見ても、深い歴史とあと幅というのが備わっている国だと思っています。

なので今回、NFTやメタバースのような、そういった新たなプラットフォームができてきますので、そういったアーティストの人たちが活躍できる場というのを、今回は日本博という事例が1個大きく出ていますけれども、これに終わらず、引き続きいろいろな場をつくっていくというのを、文化庁さんや霞が関の皆さん、政府の皆さん主導でやっていただけると、すごくうれしいなというのを思っています。

また、民間も動きやすいように、そういった働きかけを国のほうからも、国策としてしていただけるような、そういった環境づくりを、引き続き来年以降もしていただけるとうれしいなと思うところで、コメントをさせてください。以上になります。

【吉見座長】 どうもありがとうございました。冒頭言っていたことは、税制を含

めた法的な制度をどうつくっていくかという話と非常にリンクしますので、この場に法律の専門家がもうちょっと欲しいという気が改めていたします。

あと若手経営者の方々、起業家の方たちの今の流れはとてもよく分かるお話で、私も同感です。基本的には、対話を重ねていくしかないようなところもあって、文化庁の皆さんの想像力を広げていただくことも必要だし、御理解をいただく言葉を見つけていくということも必要です。次のステップがあれば、そのようなセッティングをかなり積極的につくっていくという、経済界、起業家との対話というところではぜひ必要な気がいたします。

【小池委員】 ぜひお願いします。

【吉見座長】 山田委員、お願いします。

【山田委員】 すみません、2巡目になりまして。先ほど岡室先生がおっしゃっていたことだと思うんですけども、この資料をまず誰が見るのか、オーディエンスはどこかと考えたときに、政策立案者の方々も多いと思うので、先生もおっしゃっていたように、最初に、文化とは何かというのを一言、簡単に入れたほうがいいのではないかと思います。

例えば、文化というのは国民の生活を潤し、世界に対して国のプレゼンスを示す重要なソフトパワーであるとか、何かそんな感じの、改めて文化とは何かという一言、今、文化庁が捉える文化とはこれなんだ、みたいなのが一言、この序のところにあってもいいのかなというのを改めて感じました。

それから、文化とは何か、どういうものが文化かというのが土壌という表現でこの中にあると思うんですけども、確かにここに食や生活文化的なものというのは入っていないと思いますので、それを入れるのかどうかというの、今さら時間がもうないのかもしれないんですけど、ここに入らないのかもしれないんですけど、議論があったほうがよかったのかなと思っています。

先ほどどなたか、第一次産業はみんなアートなんだみたいなこともおっしゃっていましたが、私もそうだと思いますし、フランスなどではシェフというのは、アーティストとして認知されていますので、そういった文化というのはどこの範囲まで捉えるのかというのは、ここで明確にしたほうがいいのかなとは思いました。以上です。

【吉見座長】 後半のことに関しては、私の認識は、食も、それから大工や左官やそういう方々も全部この文化の範疇に入っているという認識で、これまで議論してきましたので、いわゆるアートや純粋芸術の範囲には全くとどめていないつもりです。

金野さんが先ほどおっしゃったような生活文化的なものも全て文化だということは、最

初の会でも非常に強く申しましたし、そういう認識からこの議論全体が出発しているという認識を持っていますので、まだ不十分だったらもっと強めますけれども、そういう認識を少なくとも持っています。

それから、政策立案者のところは重要なことで、多分、これを政策的にいろいろ対外的に押し出していくときには、この報告書を全部をきちんと読んでくれる方はそんなに多くなくて、私は間違っているかもしれませんが、きっと、これから文化庁の皆さんが、ここから1枚のポンチ絵をつくるんです、省庁お得意の。そのポンチ絵は大体みんな見る。

そうすると、それがどのような言葉を使って、何をどう押し出していかって結構重要なことになりますね。委員の皆様には、その辺りもしっかり見ていただきたいし、その1枚がしっかりしたものになっていくということも重要なことかと思えます。

ほかに御意見、いらっしゃいますでしょうか。生駒委員、お願いします。

【生駒委員】 すみません、2巡目お話しさせていただきますが、今、山田委員がおっしゃった文化の定義というのは、私もすごく重要だと思っております。

加えて、岡室委員がおっしゃった、この社会の中で、文化に対するリスペクトが、欧米に比べると、私は薄いと思っています。

なので、文化と経済を結びつけようとしたときに、そこが非常に重要な部分ではないかと思っているんです。

ベネッセを立ち上げられた福武総一郎さんが、「経済は文化のしもべである」という、これはどちらがしもべか、それはどちらでもしもべになり得るとは思うんですけれども、どちらが上、下の問題でもないとは思うんですけれども、結果としてそうおっしゃった。

あの直島をつくられた福武さんが、世界から重要なアート関係者を直島に引き寄せるような場をおつくりになったということは、何がしか、重要なメッセージが込められているのではないかと思っております。

これは先ほどからもお話に出ています学校教育の中での文化の在り方、伝え方であるとか、この社会の中で、文化に取り組んでいる人たちに対してリスペクトしていく。

非常に、文化というのは個人的な作業から生まれてくるものだと思うんです。経済的効果を生むために文化をやろうと思っている人よりは、何かすごく表現をしたくて、結果としてアーティストになっている方も多いと思うんです。

こういう循環、エコシステムを、今ここで考えていることはすごく大きな意味があると思っております、今回の報告書は大きなステップになると思うんですが、その根幹の部分に、

文化とは何たるやという、今この時点での日本における文化の定義づけや、それとその経済がどのようにエコロジカルにつながっていくかというの見渡すいい機会だと思いますので、その辺り、文化の定義だけはどこかに、冒頭に、今の日本だからこそできる文化の定義というのが盛り込まれるとよいかなと思いました。

以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。今、生駒委員から言っていたことに引っかければ、瀬戸内芸術祭の来訪者がヴェネチアビエンナーレを超えたそうです。

数が多ければいいというものでもないんですけども、福武總一郎さんと北川フラムさんが始めたところがそこまでなっているという、これも一つの成功例ではないかと思えますし、それは一体なぜそのことが起こっているのかということも、しっかり、我々の視点から押さえていく必要があると思います。

時計を見ると、皆さんが非常にてきぱきとお話をいただいたおかげで、まだ30分あるんですよ。

それで、もう一つ御意見いただきたいと思うのは、先ほど金野委員から、図がいっぱいあるけど、1つにならないかという御指摘をいただいていた。私もそう思います。

何か図がどんどん増えていくと、印象がかえって薄まる気がしますね。そうすると、この図を1つにしていくには、先ほど、3ページの図がいいのではないかと、非常に示唆的な御意見もいただきましたけれども、どのようにまとめていくのが重要です。

最終的には多分1枚のパワポになるんだと思うんですね。ですので、一枚の図をどうしていくのがいいんだろうかという御意見をいただきたい。これ1つです。

それからもう一つは、取組案がまだ何か横に並んでいる感じがするので、ある種、工程表的なものになっていく必要があるのではないかと思います。

これについても、ではこの取組案としてずっといろいろ出ているものが、どのような工程表になっていけばいいのか、ということについても、御意見があればぜひいただきたいと存じます。

金野委員、お願いします。

【金野委員】 今の3ページの絵を見せてもらって、まだしっかり、これ見たばかりなので考えられていないですけど、これに7つの「渦」をどう引っかけかということだと思います。

第1の創造的循環と第2の創造的循環をどう因縁つけるかというところはあるんですけど、

基本的にこのループにいろいろな循環が。で、特に左側ですよ。先ほどから出ている企業や、若手起業家などというプレイヤーが左のほうにきついているんですよ。その辺があると、文化経済の循環の絵になってくのではないかと思います。

もう一点、そのエコシステムの工程表ですね。構造化をどうするかというのは、幾つかのシナリオがあると思うんですよ。皆さんそれぞれの専門で、こうやればできるというシナリオがきつくとあると思います。

私の場合は、常に言っているのが空間アプローチということで、まず空間をつくりましょうということですね。だからバーチャルなネットワークのエコシステムというのもあると思うんですけど、基本はエリアで切った、リアルな空間のエコシステムだと思うんですよ。

〇〇市とか、〇〇小学校区、〇〇城下町のようなエリア設定があるんですけど、そこでこの循環をきちんと見える化するということですね。

そこに文化芸術活動がたくさんありますので、それを束ねて、価値づけをして、そこに企業を引っ張ってくる活動をしまして、リアルにモデル地域を幾つかつくって、これが文化経済ですよという。

地域を分散ミュージアム化するということですけど、そういうことが一つのシナリオではないかなと思います。以上です。

【吉見座長】 どうもありがとうございました。できるだけこの今の点について、御意見をいただきたいと思います。岡室委員お願いします。

【岡室座長代理】 まだきちんと考えられてないので、あまり現実的な意見ではないかもしれないんですが、この3ページの絵に、街を含められないかと思うんです。

確かにこれはこれで、樹木を育成するイメージで完結していて美しいのですが、風や水や自然も、街を含みながら循環しているわけですよ。街には例えば企業やいろいろなものが含まれていくんだと思うんですね。企業であったり、様々な文化の享受者だったり。

このように樹木を育成して循環させていくのがエコシステムなのでしょうが、そこに街の要素を含めることで企業などを含まれるのではないかと思います。すみません、あまり具体的な提案ではないんですが。

18ページ以降の工程表の問題に関しては、先ほども少し申し上げたんですけども、短期的にできることと時間のかかることをある程度段階的にまとめつつ、これも何か一つの循環を描くような、一つの物語にできないのかと思いました。

現状では、羅列というか並列的に書かれているように見えるので、これがこうなってこう

繋がれば、こういうことが可能になって、結果的にこういう、最初のほうで言っているような循環が形成されますというような。そしてそれぞれの項目について、このような支援が必要であるとか、こういうアクションがあればこういう循環がうまく回っていくんだという、工程表自体を一つの循環のように、一つの文化を形成する物語のように書けないのかと思います。

両方ともすごく抽象的な思いつきで、申し訳ないです。

【吉見座長】 ありがとうございます。今、岡室委員に言っていただいて、私がなぜこう何となくまだ不満を持っているのかってすごくよく分かりました。

前半のまちの話はもう150%ぐらい同感です。物語というのもおっしゃるとおりで、岡室先生の御専門に近いところでいえば、ドラマができる。で、ドラマを見てみんながわくわくしたり、企業の方も、それなら乗ろうかとなったりすると思うのですね。

だから、まだまちがないのとドラマがないというのは、まだ真ん中のところ、せっかく文化の話なのにわくわくしないという、その問題のような気が今お話を聞いていて思いました。

黒澤委員、佐伯委員でお願いいたします。

【黒澤委員】 黒澤です。先ほどの3ページの絵ですけれども、共有していただいて、今回、文化と経済の話なので、この図は一つ大きなグランドデザインとしてはあるかなと思うんですけれども、例えば、教育関係者がこれを見たときにどう思うかなと、少し気になるころがあるんです。

例えば、右側にあります「豊かな土壌が活動の基盤となる」で、様々な人たちが芸術活動に関わって、第2の創造的循環で、価値づけされたものであればこの循環ループに乗るんですけども、価値づけされないものほどこに行っちゃうのかとか、左側に行くと「資金の再投入」とかあるわけなので、何かその価値の、同じ、文化的価値や経済的価値といったその「価値」という定義についての、少し分野によって、あるいはその立場によっての違いのようところが丁寧に書かれていないと、このループに乗らないものは価値づけもされないし、資金の再投入もなく、土壌づくりにも寄与しないんだみたいな、何かそのように見えてしまうのは危険かなと思いがらいました。

だからといって、具体的にどうすればいいのかなというのは分かりませんので、先生方の御意見もお伺いしたいところです。

それから吉見先生がおっしゃっていた、アクションプランの5年、短期、中期、長期のよ

うなので、長期10年のような感じで、随分、ある意味、気の長い話だなと思いながらパワーポイントを拝見しているんですけども、ある時、閣議決定されたものをお読みすると、例えば学校教育における芸術活動の充実や、民間の支援活動の活性化や、積極的に文化芸術に関する云々で優れた芸術の鑑賞機会の充実を図る、みたいなことが閣議決定されたことがあるんです。

この文書って、今回この書かれている報告書で、強化する、推進する、充実を図るなど、そういうものとあまり変わりなくて、先ほどの閣議決定って15年前のものなんですよ。

今回私、忘れもしませんが、吉見先生が文化庁にたたきつけてやるというようなものが、もう少しドラスティックに出るポイントとして、期限をもう少しシビアに見て、具体的な目標に対してどう努力していくのかということが各アクションプランに書かれていないところが、ちょっとこう、言葉は悪いかもしれませんが、これだけの先生方が集まって、もう少し突っ込んだところに意見提言をして置いていくというところをつくったほうがいいのかなと。

それはもう具体的なアクションプランのところに、タイムラインを引いて、その目標を少し前倒しに考えていくということが必要なのではないかなと思っています。以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。

厳しいチャレンジングな期限を、もうちゃんと書いちゃうということね。書いちゃって、そうして逃げられないようにする。

【黒澤委員】 そうですね。

【吉見座長】 そういうことを、意図的にやったほうがいいということですね。

【黒澤委員】 そう思います。そうしないと、非常に美しい文章ではあるんですけども、いつそれが実現するのかというということになってしまうし、国際的な時間の流れを考えると、例えばDX、10年待ったらどうなるかというのは想像できますか、皆さん。

もう1年とか2年とか、そういうタイムラインでみんなが動いている中で、何を追いつきたくて何を追い越したいと思っているのかとか、そういうところがあまり明確でないところが、少し物足りないかなというのは私の意見です。

【吉見座長】 いや、よく分かります。タイムラインの問題ですね、それは本当に。

それから最初におっしゃった学校の問題は、これはもう詰めていけば非常に重なるところがあると私は認識しています。

中教審のほうでも、2018年に、グランドデザイン答申というなかなかしっかりした答申が

出て、そこの一番のポイントは、高等教育の学修者本位の体制へのパラダイムチェンジということだと思います。

つまり、先生が学生に、というか生徒に教えるというのではなくて、むしろ学修者、つまり、生徒や学生ですよね、そこが何を学のぶかというところから、今までの教育の在り方を全部再点検していこうということで、これは地域の人々や一人一人のアーティスト、フリーランスのアーティストの側から、文化や、文化と経営の循環を再定義していこうという、この流れと非常に重なると思っております。

佐伯委員、お願いします。

【佐伯委員】 だんだん話がリアルになってきているように思うんですけど、質問といいますか文化庁に対する質問かな、吉見先生というよりも。

この7つの渦、具体的取組案、強弱をつけるというか、中長期と短期を分けるということとありまして、それともう一つ、アート振興ワーキンググループから出ているアート・コミュニケーションセンターという存在がありますよね。これが、この枠の中でどのような立ち位置にあるのかというのは書き込まれていないので、イメージをしにくいところがあるんですが、この辺いかがでしょう。どう考えれば。

新しくこれは完全にもうできるということなので、この7つの渦に沿った取組案とは別個のはずがないのですが、この辺の理解というのはどのようにすればよいでしょうか。これは質問です。何か分かる範囲で教えていただきたいなと思って、手を挙げました。

【吉見座長】 ありがとうございます。これは寺本課長にお答えいただいたほうがいいですね。

【寺本課長】 アート・コミュニケーションセンターというのは、背景、知識も含めてまず御説明申し上げますと、独立行政法人の国立美術館、6つ7つぐらいの美術館の機関が存在する中で、1つの法人を形成していますけれども、その法人横割り、横断的に、組織の中を横断的に、日本全体のアートの振興を進める組織としてつくられるものになります。

具体的には、日本のアートの文脈というんでしょうか、それから資料など、そういったものを整理をしながら、世界に対して発信できるような、翻訳など含めて材料にしながら、それを世界に対して発信していく、そういう世界に対する窓口になっていく。

それから、国内の国立以外も含めた様々な美術館などの結節点になって、あと振興全般をリードしていく組織、そういうイメージで御理解いただければと思います。

それで、御質問いただいた点については、アート・コミュニケーションセンターそのもの

が、この7つの渦の何かに入るかということよりも、アート・コミュニケーションセンターが取り組む活動が、かなり様々にあります。

先ほど申し上げたように、世界に対して日本のアートの文脈を発信していくとか、そうなるグローバル市場への積極的な関与だったり、ある種のビジネス的に捉えると、またいろいろな議論がございますけど、ある種のプロモーションであったりブランディングであったりというような側面もあるかと思えます。

それから国内の美術館人材、美術館の関係者の方々の結節点になって、様々な人材育成につながるようなこともやってまいりますし、それから美術館の中のDXの拠点になっていくような、軸になっていくような、そういったこともあるかと思えます。

すなわち、申し上げたいのは、そこでの活動そのものが、おのこのう領域に絡んでくるという意味での在り方と、御理解いただければと思えます。

【佐伯委員】 分かりました。記載がないものですから、何らかの記述が、あるのかなと思っていましたのでけれど、なかったものですから、質問しました。

【吉見座長】 ありがとうございます。全員の委員の方に御発言いただきたいと思えますので、サコ委員をお願いします。

【サコ委員】 ありがとうございます。最初にまず図のことで、2も3も4も何か非常に分かりにくいところがあって、特に先ほど以来皆さんは、3のほうを見せていただければ。

多分、想像してみたんですけど、これ日本語を取ってしまったら、どこを指すんだろうなと思ったんですね。多分、日本語が書いてあるから日本っぽく見えるけれど、どこでもあるようなものですね。

だからこう、日本の文化的特徴を表すようなものなのかなというところはちょっとあって、一番下の、多分土壌づくりのところだけかなと思うんですね。

だからそういう意味で、もう少しこう、この図の中でも文化性を感じたいというのは勝手に思っているところです。

もう一つは、言葉遣いで気をつけたほうが良いと思ったのが、文化と経済、文化芸術、文化芸術と経済ってこうすごい結構、文書のば一と全体の中を見ると、結構乱用している可能性があります。

結構混同して、同じ意味なのか同じ意味じゃないのか、文化単純と文化芸術とか、何かその辺りは整理する必要があるかなと思いました。

先ほど以来出てきている芸術教育などいろいろなことがあると思うんですけど、この中

でのアートというものが、もしかしたら、ちょっと先に、特に経済の面で先行してしまうのではないかなと思うんですね。

最近、皆さんは芸術という言葉ではなく、アートという言葉を使って経済活動していることが多いんですよ、今のメタバースもそうだし。何かどちらかという、「アート」というものに非常に、特に現代アートですよ。現代美術、現代アートというのは、抽象度が高く、何かその辺り、すごく曖昧に経済に乗りやすい。

だからこれ、我々が今やっているところで、文化芸術全般の、先ほどの定義の話が出たけど、この全般がきちんと循環的に進むような形に持っていけないといけないと思うので、その辺りは多分、アートが先に先行して、アートだけに先に助成金をつけたり、いろいろなものをつけて進んでしまうとよくないので、その辺りはきちんと姿勢をよくして、先に定義とそのきちんとゴールをしっかりと示しておいたほうがいいのではないかと思います、発言させていただきました。とにかく、図にもうちょっと物語を持たせてほしいと思っております。以上です。

【吉見座長】 ありがとうございます。図、特にこの3ページの図を軸にするとすると、まだまだ改善の余地があるということだと思います。

本当はそれから、後でおっしゃっていたアート、アートに限らず、クリエイティブだとかもういろいろこの日本語は片仮名を便利に使って、要するに曖昧なことをごまかすという大変得意技があって、なかなかこの片仮名をどうするかというのは厄介ですけども、頭置いておきたいと思います。

山口委員、お願いします。

【山口委員】 この工程表の中で、どうやって具体化させるか、スピードアップして進めていくかというのがポイントかと思うので、先ほどの金野先生の空間アプローチというのに私も賛成です。エリアなどを定めて、例えば文化芸術エコシステムモデル地域とか、先に進められる所をモデルをつくって進めていく。現在進めている、文化観光拠点もその一つと大きくとらえて、様々な都市やエリアの特色を活かした文化芸術エコシステムをモデルとして、横展開していくことも一つの方法かと考えます。

【吉見座長】 ありがとうございます。先ほどの金野委員の御意見とも重なる場所、空間、それについてモデルをつくることから軸をつくっていくという選択もあるのではないかと思います。

大分終わりの時間が迫ってきていますけれども、これだけは言っておきたいという委員

の方いらっしゃいますでしょうか。もし、言ったら最後の御発言になるかと思えますけれども、よろしゅうございましょうか。

多分幾つかの議論がまだ残っていると思います。確認しておきますと、まず、中間組織とカウンシル機能の強化が全体で軸になっているんですけども、具体的にどのようなようにつくっていけばいいのという議論がまだ十分できていません。次に、グローバルな環境の中でのソフトパワーの問題を、省庁横断的に、つまり文化庁だけが担うというよりも、全省庁横断的に球として出していくための戦略をどうするのかという点もまだ議論が詰まっていない部分があるかと思えます。第3に、経済界、産業界、企業をきちんと巻き込んでいく仕掛けをどうつくっていくのかという問題もまだ残っています。第4に、NFTをはじめとする様々な新しいデジタルをベースにした取組の中で、あるいは寄附の問題もそうですね、寄附の問題も含め、法的な制度の問題として落としていかないといけない課題がある。最後に、文化の定義とも関わりますけれども、生活文化のレベル、職人や農業など、その地域の一番深いというか、ところまで落としてこの問題を考えないと、文化の枠は広がらないという、そういうこともまだ残っているように思います。

ほかにも幾つか残っている課題があると思うんですけども、当面は、幾つかの課題を洗い出しつつ、私どものほうにお任せいただいて、最終的な報告書をまとめていって、文化審議会のほうに御報告したいと思えます。

ただもちろん、委員の先生方のほうから個々、ここはこれ入れろとか、これちょっとまづいんじゃないとか、そういう御意見をぜひ事務局の側にどんどん出していただいて、できる限りこの寺本さんたちが対応されると思えます。

図は、すぐにはできないですね、多分ね。この図と工程表を、これでいこうみたいになるには、もう三、四回ディスカッションしないと思えますので、程々に満足するぐらいで、取りあえずは中締めみたいにするしかないのではないかという気がします。次の期がもしあるのだとしたら、そこはもうちょっと、詰めていきたいと思えます。

それでは、あと三、四分になりましたので、事務局のほうから委員の先生方に、全員に言うていただくことは何かございますか、寺本さんや林さんのほうから、何か。

【寺本課長】 いろいろ意見ありがとうございました。取りあえず先ほど座長からもお話ありましたように、中締めの報告書をまとめるような形には持っていきたいと思えます。

今日の御意見をしっかり踏まえながら。

【吉見座長】 この部会はどうなりますか。

【寺本課長】 当然これ、具体の取組をこれからも続けていくこととなりますので、進捗も含めて、いろいろ御議論いただいたり。

【吉見座長】 この先があり得ると。

【寺本課長】 はい、あり得ますし、さらには個別で挙がっている取組、具体の取組の様々な連関や循環という話もございましたけれども、それをつくり出すためにも、具体で設計しなければいけない取組など、様々がございます。

そういうのも、例えばワーキングのような形で議論したりしながら、循環をつくっていくと、そういうことで思っております。

【吉見座長】

短い間でしたけれども、僅か3か月で4回の会議でございましたけれども、非常に多くの方々に御参加いただき、また大変示唆に富むというか積極的な御発言をいただいて誠にありがとうございました。

先生方の御発言や御助言があったからこそ、短い期間の割には、結構いい報告書をつくるころまで来れたのではないかと思います。改めて、深く御礼申し上げたいと存じます。

これで今期は最後になります。時間もちょうど今6時ですので、終わりにさせていただきたいと存じます。本当にありがとうございました。

事務局から連絡事項ありますか。

【寺本課長】 取りあえず大丈夫です。今日のを踏まえて、最終的に取りまとめさせていただきます。

【吉見座長】 分かりました。私のほうからも委員の先生方に深く御礼を申し上げて、今回の部会を終了させていただきたいと存じます。誠にありがとうございました。

— 了 —